

「ミュンヘン・アジア美術および 文化愛好家協会」の活動をめぐる一考察

ードイツ近代における日本美術および 中国美術への関心ー

安松 みゆき

【要 旨】

本稿では、1909年にミュンヘンで開催された記念すべき展覧会「美術における日本と東アジア」のその後の影響を解明することを目的に、ミュンヘンに設立されたアジア関連の研究組織である「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」に注目して、これまで知られていなかったこの活動の軌跡を追いながら考察した。その結果、同協会が中近東から極東までの幅広い範囲を視野に入れながら、特に中国と日本を重点的に取り上げていたことが確認できた。またこの二国間では、類似するテーマの研究を並行してすすめ、1909年の展覧会以来、中国と日本を基軸にしてアジアの関心を取り上げる立場が継承されていることを把握し得た。

【キーワード】

日本および中国美術受容、日中関連美術研究、アジア美術の受容、ミュンヘンのアジア美術、1909年「美術における日本と東アジア展」

はじめに

ドイツ近代において日本美術および中国美術に関する研究がどのようにすすめられていたのかを把握するとすれば、まずミュンヘンから検討をはじめるとも可能な選択肢の一つであろう。ミュンヘンは、東アジア研究の歴史において、早い段階で関連する博物館を設置したことに象徴されるように、ドイツのなかではベルリン、ハンブルク、ケルン等とともに、重要な足跡を残した都市だからである¹。論者はこれまで主に日本美術研究の動向を追ってきたが、その際に、ミュンヘンでは、早くから東アジア美術の大規模な展覧会「美術における日本と東アジア」が、日本美術と中国美術に焦点をあてて行われていたことを確認した²。この展覧会は、日本美術研究だけでなく、ミュンヘンでの中国美術の研究動向を反映していると推察された。

そこで小論では、ミュンヘンで開催された1909年の展覧会「美術における日本と東アジア」のその後の影響を解明することを目的に、ミュンヘンに設立されていたアジア関連の研究組織「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会 Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München」の動向に注目して考察する。この協会について日本ではその名称すらほとんど知ら

れておらず³、ドイツでも忘却されてきている。論者は、現地での資料調査を行い、ミュンヘン民族博物館リッツフェルト博士の教示のもと、同館のアーカイヴスに関連資料を確認することができたため(図1、2)⁴、これらを資料基盤として考察をすすめていく。

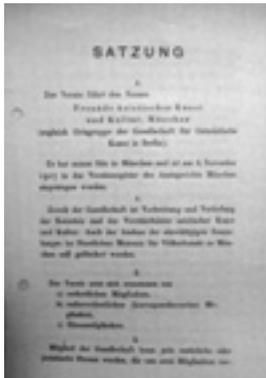


図1

会則、ミュンヘン民族博物館アーカイヴス所蔵

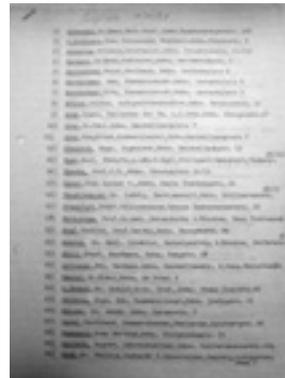


図2

名簿 ミュンヘン民族博物館アーカイヴス所蔵

1 「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」について

1. 1. 同協会会員

ミュンヘン民族博物館には、「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」が事務局を置いていたことから、同協会規約の書かれた資料が現在も所蔵されている⁵。それによると、協会の設立目的は、アジアの美術と文化に関する理解を深め、それを広く伝えることであり、目に見える成果として、ミュンヘン民族博物館にコレクションを構築することが目指された⁶。

会員は、個人か法人により、正規会員と非正規(通信)会員および名誉会員に分かれる⁷。会員としての受け入れは、二名の会員からの推挙を受けて理事会で決定され、会則に基づいて年会費を支払った時点より会員として有効となる⁸。会員になれば、年会費が、定期的で開催される総会で決定され、年間8マルクあるいは5マルクを支払う義務が生じる⁹。ただし、年会費免除の場合もあり、それについては理事会で採択されることとあるだけで、それ以上の具体的な説明は会則で規定されていない¹⁰。

会員には同協会の年報が配布され、さらに、ベルリンの「東亜美術協会 Gesellschaft für Osiatische Kunst」の刊行物を希望する場合には、20マルクを追加で支払うことで、ベルリンの「東亜美術協会」の雑誌を入手することができた¹¹。ベルリンの「東亜美術協会」は、当時においてドイツに限らず、ヨーロッパのなかでも東洋美術に関して最も大きな組織を形成しており、「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」は、その協会の支部としての役割も担っていたからである¹²。

非正規会員も理事会で指名されることになっていた¹³。また名誉会員は、理事会からの提案を受けて、総会出席者の9/10の賛同で選ばれた¹⁴。

退会は、死亡、退会希望、そして会員抹消を受けて処理された¹⁵。ただし退会希望者は、遅くとも4月1日までに同年10月1日からの新たな活動から停止することを書面で通達する必要がある¹⁶。会員の抹消には、限定された理由の場合にのみ有効であり、理事会によって決定された¹⁷。

1. 2. 理事会

全体の活動は10月1日からはじまって9月末までの一年間の単位で行われた¹⁸。

同協会の組織は大きく二つに分けられ、理事会と実行委員会から成り立っていた¹⁹。まず理事会は、第一理事1名、副理事2名、書記1名、会計1名で構成されていた。理事を勤められなくなったときには、かわりに正規会員がつくことになっており、採択において同数の場合には、第一理事の採択が優先された²⁰。

1927年に協会が立ち上がったときの理事会では、第一理事にミュンヘン大学教授でミュンヘン民族博物館長であった民族学者のルツィアン・シェルマン Lucian Scherman 博士、第二理事にはミュンヘン市長のカール・シャルナーグル Karl Scharnagl、書記にはミュンヘン大学の私的講師バハホーファー L. Bachhofer 博士、会計には公使フーゴ・ザックス Hugo Sachs が選出されている²¹。

理事会では、芸術的および学術的な活動をするために、実行委員会をたちあげ、その活動について次の総会で報告された²²。理事会のメンバーの多くはアジアの専門家でないため、活動を実施していく上で実行委員会の設置は不可欠だったといえる。1927年時の実行委員会のメンバーを例にとると、大学教授ベルクシュトレッサー G. Bergsträsser 博士、オットー・ベルンハイマー Otto Bernheimer、ツェツィーリエ・グラーフ Caecilie Graf、グラッツル E. Gratzl 博士、大学総長ハイゼンベルク A. Heisenberg 博士、大学教授ピンダー W. Pinder 博士、大学教授プレートリウス E. Preetorius 博士、画家でアカデミー総長シュノルフォンカロルスフェルト H. Schnorr von Carolsfeld、大学教授シュピーゲルベルク W. Spiegelberg 博士の名前が認められる²³。このような顔ぶれにおいて注目されるのは、画家で東洋美術研究者あるいは日本美術研究者プレートリウスや、ツェツィーリエ・グラーフの他に、西洋美術史家の W. ピンダーや、ナザレ派のひとりとして19世紀の絵画を牽引した画家 H. シュノルフォンカロルスフェルトが含まれていることである。ミュンヘンにおいても、アジアは関連研究者のみならず、西洋美術の専門家や画家たちにとって興味深い対象であり、アジアへの関心の広がりがかうことができる。

1. 3. 総会

さて、一般の会員が直接かかわる総会についてだが、同協会は、ベルリンの「東亜美術協会」の支部の役割も担っていたため、ベルリンの「東亜美術協会」との定期的な交流も行われることが前提となっていた²⁴。

実際に総会は秋の11月15日までに定期的に開催され²⁵、そこで年間の活動報告と会費が確認された。総会の協議については、書記によって次の総会開催の少なくとも2週間前までに書面でまとめられた²⁶。また二年毎に理事会のメンバーが選挙され、再選も可能であった²⁷。

臨時に総会を開催する場合には、理事会によって召集され、その際に、少なくとも正規会員の1/4の召集があり、議事日程の議案にしたがって理事会に書面で提案されることが必要であった²⁸。

議案の採決は、会員の多数決で決められるが、同数の場合には、議長に権限が委託された。ただし、その会に決議能力がない場合には、新たに総会の開催を取り決めて会員に知らされ、決定権のある会員の多数決が最終的に有効となった²⁹。

こうして総会で決定された事項は、書記によって書面でまとめられた³⁰。ただし書記が出席できない場合には、総会の議長によって任命された正規会員によって作成され、最終的に議長と作成者の署名がなされた³¹。

議会の変更や協会目的の変更、あるいは協会の解散は、正規会員の3/4の賛同によって有効となり、なおこの数は同様に正規会員の多数に相当するものと考えられていた³²。解散の場合に、協会の資産はミュンヘン州立研究所に移譲されることが決められていた³³。

1. 4. 会員

このような「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」に所属していた会員についてだが、ミュンヘン民族博物館アーカイヴズに保管されている1930/31年の決算報告とともに記載された名簿を参考にすると、90名が認められる³⁴。具体的に、会員の特徴として、ミュンヘン民族博物館などに関係する会員が見られる一方で、美術に関係する絵画館の研究者はいない³⁵。また、法人としてバイエルン州立図書館が入っており、図書資料の収集にも関心があったことが想像される³⁶。さらにミュンヘンの南部の町ムルナウからの会員が確認し得るが、ムルナウは当時の前衛的な画家カンディンスキーが絵画活動を行っていた場所であり、またかれに関係する表現主義の画家も、ムルナウには結び付きが想起されるものの、この協会の会員にはなっていない³⁷。その他に、ミュンヘンの宮殿博物館が法人に認められ、さらにバイエルン王国皇太子が会員に名をつらねており³⁸、バイエルン王家の東洋美術への深い関心がわかる。そして市長、企業家、役人や医者など³⁹、コレクターあるいは、資金的な支柱になっていたと思われる人物が多く認められる。

このように「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」は、ベルリンの「東亜美術協会」の支部としての役割を持ち、ミュンヘン民族博物館長シェルマンが理事長となり、ミュンヘン市長などが理事に就任した理事会と、その基に美術史家ピンダー、画家ツェツィーリエ・グラーフや、ナザレ派の画家カロルスフェルドなどが実行委員となった実行委員会を組織していた。そして90名ほどの会員を擁して定期的に総会を開催していたことがわかった。

2. 学会主催の研究会の動向

「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」では、具体的にいかなる活動がおこなわれていたのだろうか。

まず第一に挙げられるのは、ほぼ定期的に研究会が開催され、そこで研究発表が実施されていたことである。設立から第二次世界大戦終了までを例にすると、1926年から1943年までの17年間におよそ131件の研究会が開かれている [表1]。年間で1回から最も多い14回まで実施され、設立時と終戦間近には、開催数が1回と少ないが、設立後の7年目と10年目には二桁の数で研究会が実施され、平均ではおよそ年に7回開催されたことになる。

【表1】研究会の開催回数 1926～1944年

年	研究会開催回数
1926年	1
1928年10月～1929年9月	8
1929年10月～1930年9月	13
1930年10月～1931年9月	9
1931年10月～1932年9月	11
1932年10月～1933年9月	14
1933年10月～1934年9月	7
1934年10月～1935年9月	5
1935年10月～1936年9月	8
1936年10月～1937年9月	12
1937年10月～1938年9月	9
1938年10月～1939年9月	7
1939年10月～1940年9月	6
1940年10月～1941年9月	7
1941年10月～1942年9月	5
1942年10月～1943年9月	8
1943年10月～1944年9月	1
1944年10月～1945年9月	0
	131

研究会において扱われたテーマは様々で、絵画、彫刻、版画、建築、陶器、工芸、美術コレクションといった美術関連と、演劇、音楽、宗教、服飾、映画、神話、旅行、探検といった文化関連がテーマに据えられている⁴⁰。その際に、遺跡探検などで新たな発見が報告される場合も見られるが、研究発表の大方は、研究成果の報告でなく、紹介や概説のかたちにとられている。たとえば、1928年11月15日のルートヴィヒ・バハホーファー Ludwig Bachhofer による「15世紀の日本の山水画の巨匠」の発表や、1931年11月24日のバーゼル美術館長オットー・フィッシャー教授 Prof. Dr. Otto Fischer による「漢時代の中国絵画」の発表は、特に新しい指摘は見られずに、それぞれのテーマを概説するものである。

国別に見てもその領域は広く、中国、日本、インド、東南アジア、カンボジア、セイロン、トルコ、エジプト、アフガニスタン、アフリカ、ネパール、ボルネオ、ヌビア、オセアニア、メキシコ、と本来アジアの枠組みからははずれるアフリカ、オセアニア、メキシコまでが含まれている。本来のアジア以外がとりあげられていることについて、特に指摘されていないが、おそらく、アジアを知る上で比較対象として設置されていたためか、あるいは、前述したように、同協会の母体の置かれたミュンヘン民族博物館のコレクションを構築することを、同協会の活動の目的に据えていたことから、やはり比較対象として実際に同民族博物館に所蔵される作品の領域が目されたため、と想定される。

そのなかで特に発表回数の多いのが、28件の中国と、17件の日本、12件のインドである⁴¹。この三か国に関しては、研究会のなかでも関心の高い地域であり、それらを主体に研究会がすすめられていた可能性が示唆される。

このように同協会は、定期的に研究会を開催しており、中近東から東アジアまで広くアジア全域を考察の対象としていながら、しかしそのなかで、東アジアの中国と日本、南アジアのインドへの関心が突出したかたちで、美術的な面と文化的な面で紹介されていたことが確認できる。

第二に指摘したいのは、美術展覧会などと連動して、それに関する講演等が頻繁に行われてい

たことである。たとえば、1929年6月17日には、ミュンヘン版画所蔵室で開催されていた「ベルシャとインドのミニアチュール展」を受けて、同展の関係者であったプレートリウス Dr.E. Preetorius 教授が協会の研究会で関連の講演を実施している。1930年6月9日にはミュンヘン民族博物館での特別展「10世紀から18世紀までの日中の絵画展」が行われており、東洋美術史家でベルリン東亜美術協会の理事だったオットー・キュンメル Otto Kümmel が、同展覧会に合わせた講演を実施しているのである⁴²。

さらに、なんらかの実演を兼ねた研究会も開催されている。たとえば、1931年の1月27日には、ベルクシュトレッサー教授 Prof. Dr. Ge. Bergsträsser が、カイロ、ダマスクス、コンスタンティノーブルを訪問した旅行を報告するにあたって、講演だけでなく映像をも活用している⁴³。また同年1月30日には音楽会が行われ、クルト・フーバー教授 Prof. Dr. Kurt Huber が楽器による演奏会を開いている。1935年には「鬼が島」の日本映画が規模の小さい展覧会と合わせて上映され、1937年3月19日には「ボルネオの日常」の映画が、1943年6月3日には「稲と馬」の日本の映画が、1944年1月16日には「ムルナウ」の映画が上演されていたのである。

以上のように、「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」では、ほぼ定期的に研究会を催していたことがわかった。その研究会では、中近東から東アジアまで広くアジア全域を考察の対象としていながら、考察範囲として、美術的なテーマと文化的なテーマをめぐって主に紹介されていた。しかしそのなかで、東アジアの中国と日本、南アジアのインドへの関心が突出したかたちで、中国と日本、インドは、発表回数が多いことから、研究会では、特にこの地域に関して強い関心を抱いていた可能性が考えられた。

3 中国美術と日本美術に関する具体的なテーマ

「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」で中国と日本が注目されていたことは、すでに指摘したとおりである。そこで、中国と日本をとりあげた研究報告について、その全体像を把握することを目的に、まず中国からみていきたい。

中国に関連するテーマにとりあげられたのは、古代の銅器、彫刻、山水画、壁画、版画、宗教、演劇、服飾、美術コレクション、占星術、農民文化などである。そのなかで美術に関するものとして、特に古代の銅器については、三回も発表が行われており、また絵画についても、たとえば、1930年のフィレンツェのリット Florence Ayscough Litt. D. による「中国絵画、詩、書との関係」⁴⁴や、1931年のバーゼル美術館長オットー・フィッシャー博士 Prof. Dr. Otto Fischer, Museumsdirektor Basel による「漢時代の中国絵画」⁴⁵、1940年のマックス・レーア博士 Dr. Max Loehr, München による「中国の山水画の巨匠」⁴⁶などが見られ、その関心の高さがうかがえる。考古学的な発掘の発表もなされており、たとえば、1931年のストックホルムのオズファルト・シレン教授 Prof. Dr. Osvald Siren Stockholm による「中国の発掘とその様式的な展開」⁴⁷や、1934年のバイエルン州立図書館長ライスマユラー Generaldirektor der Bayerische Staatsbibliothek Dr. Ge. Reismüller による「近年の発掘に基づいた中国古代史」⁴⁸などの工芸品の発掘を踏まえた発表は、中国の研究発表の特徴を示している。

一方の日本に関する発表では、旅行記、工芸品、歌舞伎、茶道、刀、浮世絵、明治天皇、山水画、武士道、シーボルト、日本の歴史などが見られ⁴⁹、特に重複するテーマは歌舞伎や絵画であり、たとえば、1930年にはエアランゲンのヘーリゲル教授 Prof. Dr.E.Heerrigel, Erlangen によって⁵⁰、1936年にはハンブルクのマリア・ピーパー Frau Maria Piper, Hamburg によって⁵¹「日本の歌舞伎」について報告されている。また絵画との関係では、1930年にトラウツ M. Trautz に

よって「古日本における旅行、詩、風景」が発表されており⁵²、1937年にフロイデンベルク博士 Dr. K.D. Freudentberg によって「日本の山水画の伝統と狩野派」と題して報告されている⁵³。浮世絵についても1934年にプレートリウス教授が「19世紀西欧絵画における日本の浮世絵の影響」⁵⁴の発表をおこなっており、1943年に再びプレートリウスが「日本の浮世絵 その独自性と影響」⁵⁵として報告している。

こうした日本および中国の研究発表の動向を俯瞰すると、絵画、演劇、版画など、両方に関して同じテーマが、相前後して取り上げられていることに気づく。たとえば、1930年3月20日にベルリンのレッシング教授 Prof. Dr. Lessing が中国の演劇について発表しているが、そのおよそ二か月後の5月12日には、エアランゲンのヘーリング教授 Prof. Dr. E. Heeringel が日本の演劇について報告しているのである。1936年12月1日にミュンヘンのプレートリウス教授 Prof. Dr. E. Preetrius が中国の木版画について発表したが、かれは、7年後の1943年1月12日には、今度は日本の木版画について報告している⁵⁶。あるいは1928年11月15日にルートヴィヒ・バハホーファー Ludwing Bachhofer が15世紀の日本の山水画の巨匠について紹介しており、少々年代が離れるものの、1940年12月19日にミュンヘンのマックス・レーア博士 Dr. Max Loehr が中国の巨匠による山水画についてとりあげている⁵⁷。このように日本と中国は関連性を持って注目されていた面があり、プレートリウス教授がひとりで日中両国の木版画について発表していることや、当時日本と中国を対象とした展覧会「中国と日本の絵画 10-18世紀」を受けて、1930年6月9日に東洋美術史家でベルリン東亜美術協会の理事だったオットー・キュンメルが同展について報告していたことが、象徴的な例といえるだろう⁵⁸。

前述したように、1909年にドイツでは早い段階で、東アジアと日本の美術に着目した展覧会「美術における日本と東アジア」がミュンヘンで開催された。確かに日本美術が中心に据えられた展覧会であったものの、実際には中国を併置したものであったことはすでに指摘している⁵⁹。

このような事情は、今回の考察対象である「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」の動向においても指摘できる。すなわち、アジアのなかで、中国と日本が基軸に据えられて、つねに相対する関係で、その動向が注目されていたからである。さらに、1909年の展覧会以降、1912年のベルリンで東アジア美術展が開催され、そこでも中国と日本を基軸とした動向に変わっており、その後も、中国と日本が着目されていた⁶⁰。

したがって、ミュンヘンでは、アジアあるいは東アジアの美術を対象とした場合、1909年の展覧会でも日本美術が単独で理解されるのではなく、中国との関係で比較対象に捉えられていたが、その流れは、その後もそのまま継続され、中国と日本とは並行した関係で把握されていたことが、確認できる。

終わりに

小論では、ミュンヘンに設立されたアジア関連の研究組織である「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」に注目して、その活動の軌跡を追った。まずは、この協会が日独双方において忘却されているために、今回ミュンヘン民族博物館アーカイブスの調査において確認できた資料によって、その組織構成や活動の概要を明らかにした。さらに研究発表の対象地域を分析し、同協会が中近東から東アジアまで、アジアの広い範囲を視野に入れていたこと、しかしそのなかで、とくに中国と日本を重点的に取り上げていたことを確認した。またこの二国間では、類似するテーマの研究を平行して進めていたことも把握できた。ミュンヘンで開催された1909年の展覧会「美術における日本と東アジア」が、中国と日本を基軸にして東アジアの美術を

紹介していたが、その流れをそのまま受けるかたちで、「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」においても中国と日本が、アジアへの関心のなかで、中心的な位置を占めていたことを研究動向に読み取ることができよう。

謝辞

本研究に関する資料調査ではミュンヘン民族博物館リヒツフェルト博士に多大な協力を得ました。ここに感謝申し上げます。(本研究は平成23-25年科学研究費補助金挑戦的萌芽研究、代表者木島史雄、23652016「愛容者の立場の違いに起因する中国美術の多面性と豊穰性に関する研究」による成果の一部をなす。)

- 1 ベルリン、ケルンに東洋美術館が、ハンブルクに装飾博物館が設置されている。他にもハイデルベルク大学において東洋美術の研究がすすめられている (Günther Haasch v.Hrsg.: *Die Deutsch-Japanischen Gesellschaft von 1888 bis 1996*, Berlin1996.
- 2 Miyuki YASUMATSU:Japanese Art at the 1909 Exhibition of Far Eastern Art in Munich. 別府大学大学院紀要/別府大学研究出版委員会編、2004年、17-26ページ。
- 3 ドイツの日独関係を詳細に論じた以下の文献には、名前の指摘もない。G.Haasch v.Hrsg.: *Die Deutsch-Japanischen Gesellschaften von 1888 bis 1996*, Berlin 1996.
- 4 2012年11月上旬に同民族博物館にて資料調査をおこなった。
- 5 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*. ミュンヘン民族博物館アーカイブズに所蔵されている資料。ページや年代の記載はなく、年代の特定にかかわるデータとして、理事会のメンバーの選挙が1931年11月9日と印刷されている。それゆえ、この資料は1931年のものとみなし、またページに関しては、便宜的に表紙から1ページとしてページをふることで、典拠資料の明確化を試みる。
- 6 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 3.
- 7 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 3.
- 8 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 3-4.
- 9 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 5.
- 10 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 4.
- 11 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 5.
- 12 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 5. またミュンヘン民族博物館アーカイブズには、「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」が東亜美術協会の支部として活動することを確認する1928年10月26日付の書簡が残されている。『東亜雑誌 *die Ostasiatische Zeitschrift*』の編集者ヴィリアム・コーンから、「ミュンヘン・アジア美術および文化愛好家協会」理事長ルツィアン・シェルマンに宛てた書簡である (Brief von der Gesellschaft für Ostasiatische Kunst, Herausgeber William Cohn an Herrn Geheimrat Prof. Dr. L. Scherman, am 26. Okt. 1928.)。
- 13 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 4.
- 14 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 4.
- 15 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 4.
- 16 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 4.
- 17 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 4.
- 18 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 4.
- 19 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 5.
- 20 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 5.
- 21 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 8.

- 22 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 5.
- 23 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 8.
- 24 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 5.
- 25 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 6.
- 26 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 6.
- 27 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 6.
- 28 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 6.
- 29 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 7.
- 30 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 7.
- 31 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 7.
- 32 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 7.
- 33 *Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München*, 1931, S. 7.
- 34 名簿はタイプライターで記載されているが、タイトルは、後日の資料整理によって記載されたと思われる鉛筆書きで、一枚目の上部に「Mitglieder 1930/31」と書かれているのみである。便宜的にこの資料を Mitglieder1930/31と記載することにする。会員についてはアルファベット順で1番から順に番号が振られており、一ページに30名ずつ、計3枚にまとめられており、二ページ目からページ数がタイプライターで記されている。Mitglieder1930/31, S. 1-3.
- 35 Mitglieder1930/31, S. 1-3.
- 36 Mitglieder1930/31, S. 3. 図書館には浮世絵などのグラフィック作品も所蔵されているので、それらへの関心もあった可能性は含まれる。
- 37 Mitglieder1930/31, S. 1-3.「年譜」『レンバハハウス美術館所蔵、カンディンスキーと青騎士』展覧会カタログ、2010年11月23日-2011年2月6日、173ページ。
- 38 Mitglieder1930/31, S. 3.
- 39 Mitglieder1930/31, S. 1-3.
- 40 全研究発表についてはすでに表にまとめているが、紙面の関係で今回の掲載は難しいため、別の機会に譲る。
- 41 インドは、中国、日本に続いて12件で、掲載回数の多い国となる。
- 42 他には、1926年にアウグスブルク芸術協会で開催された東南アジア美術展覧会にあわせて Prof. Dr. E. Preetorius が展覧会開催について講演し、1932年2月6日には、日本ポスター展などにあわせて「東アジアにおける権力としての報道」と題して Dr. K. d'Ester が講演し、1934年3月13日には、ミュンヘン民族博物の特別展「オリエント絨毯と東アジアの工芸品」の見学が行われ、1936年1月12日には、木版画展にあわせて「中国版画」について Prof. Dr. E. Preetorius が講演している (Ausstellungseröffnung südasiatischer Kunst Augsburg, Kunstverein, 1932, 6. 02. ; Prof. Dr. K. d'Ester Die Presse als Grossmacht in Ostasien, verbunden mit einer Ausstellung von japanischen Reklakaten usw. 1934, 13. 03. ; Besichtigung der Sonderausstellung im Völkerkundemuseum: Orient-Teppiche und Ostasiatische Kunstgegenstände, 1936, 01. 12. ; Prof. Dr. E. Preetorius, München Die Graphik Chinas mit Ausstellung erlesener Holzschnitte aus dessen Sammlung, die verschiedene Druckarten des gleichen und nachgeschnittenen Stockes). 1936, 15. 12. ; Dr. Albert Herrlich bericht über die deutsche Hindukusch-Expedition1935, verbunden mit Sonderausstellung von Geräten und Bildwerken der Kafiren aus seiner Sammlung
- 43 27. 01. Prof. Dr. Ge. Bergsträsser Aus dem Volksleben von Cairo, Damaskus und Konstantinopel. Uraufführung des vom Vortragenden auf seiner Letzten Reise aufgenommenen Film.
- 44 Zusammenhang zwischen chinesischer Malerei, Poesie und Kalligraphie. 25. 02. 1930.
- 45 Die chinesische Malerei der Han-Zeit. 24. 11. 1931.

- 46 Meisterwerke chinesischer Landschaftsmalerei. 19. 12. 1940.
- 47 Die chinesischen Grabfiguren und ihre Stilentwicklung. 29. 04. 1031.
- 48 Die Frühgeschichte Chinas im Lichte der neueren Ausgrabungen. 20. 02. 1934.
- 49 Prof. Dr. H. Tanimura, Fukuoka : Das Japanische Schwert vom Standpunkt der Technik und Kunst, 24. 02. 1932.
- 50 Prof. Dr. E. Heerrigel, Erlangen : Das Japanische Theater. 09. 06. 1930.
- 51 Frau Maria Piper, Hamburg : Das Japanische Theater. 19. 05. 1936.
- 52 M. Trautz, Berlin: Reisen, Poesie und Landschaft im alten Japan. 14. 01. 1930.
- 53 Dr. K.D. Freudenberg : Die Tradition der japanischen Tuschkmalerei und die Kano-Schule, 16. 02. 1937.
- 54 Prof. Dr. E. Preetorius, München: Der Einfluss des japanischen Holzschnitts auf die europäische Malerei des 19. Jahrhunderts, 13. 11. 1934.
- 55 Prof. Dr. E. Preetorius, München: Der japanische Holzschnitt: seine Eigenart und sein Einfluss. 12. 01. 1943.
- 56 Prof. Dr. E. Preetorius, München: Der japanische Holzschnitt: seine Eigenart und sein Einfluss. 15. 11. 1928, Ludwig Bachhofer: Die grosse japanischen Landschaftsmaler des 15. Jahrhunderts.
- 58 09. 06. 1930. Otto Kümmel, Berlin: Sonderausstellung des Völkerkundemuseums Münchens, Chinesische und Japanische Malerei, 10-18. Jahrhundert.
- 59 Miyuki YASUMATSU: Japanese Art at the 1909 Exhibition of Far Eastern Art in Munich 別府大学研究出版委員会編『別府大学大学院紀要』6号、2004年、17-26ページ。
- 60 1912年にベルリンで東洋美術展覧会が開催されたが、それが中国と日本を軸としていたことが具体的な例として挙げられる。以下を参考。拙稿「ドイツの「東亜美術協会 Die Gesellschaft für ostasiatische Kunst」(1929年~1942年)にみる日本美術の研究動向」『別府大学紀要』44号、2002年、69-83ページ。

Zur Tätigkeit der "Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München"

-Ein Beispiel der Interesse an der japanischen und chinesischen Kunst in Deutschland -

In München wurde 1909 die Ausstellung "Japan und Ostasien in der Kunst" veranstaltet, die ein frühes, hervorragendes Beispiel der Ausstellung über die asiatische Kunst in Deutschland war. Danach entwickelte sich München eins der wichtigsten Zentren in der Forschung über die asiatische Kunst, dessen wissenschaftlichen Grundlage seit 1927 die "Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München" gebildet hat. In meiner Abhandlung wurde im Zusammenhang mit der Ausstellung von 1909 die Tätigkeit von diesem Münchner Forschungsinstitut untersucht, das bisher nur wenig behandelt wurde. Das Forschungsgebiet des Instituts war vom Nahen bis zum Fernen Osten erstreckt, jedoch wurde die Schwerpunkt deutlich auf Japan und China gelegt, wenn man die Berichte und Abhandlungen von den Mitgliedern beobachtet. Auch bemerkbar ist, daß die ähnlichen Themen sowohl über die japanische als auch über die chinesische Kunst erforscht wurden. Die Ausstellung von 1909 hat einen Absicht, durch die Vergleich zwischen Japan und China die ostasiatische Kunst zu verstehen. In der Tätigkeit der "Freunde Asiatischer Kunst und Kultur München" kann man daher den Nachklang von 1909 feststellen.